



## 「あまおう」7月の管理

南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

### <今月の目標>

- ◇ 炭そ病対策の徹底
- ◇ 作型に合わせた充実した苗づくり(肥料切れ、根傷みに注意!)
- ◇ 土づくりの実施と定植床の準備に向けた計画的な作業

本年度は早い梅雨入りだったものの、その後降水量が少なかったことから、ランナーの発生が遅く、一部で子苗数の確保が遅れたほ場が見られました。全体的には概ね順調に作業が進んで、子苗数も確保されています。さし苗作業は6月中旬でほぼ終了しており、すけポットは6月下旬が切り離しのピークで、遅れているほ場は7月上旬の見込みです。

病害虫では「アブラムシ類」、「ハダニ類」及び「うどんこ病」が発生していますが、今のところ大きな被害は見られていない状況です。7月は降水量が平年に比べ多いという予報が出ていますので、特に「炭そ病」を防ぐため、定期的な薬剤防除や、感染株の早期発見(見回りを多く)・早期排除(怪しい株は排除)に努めて下さい。

### <向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



発表日: 6月26日、福岡管区気象台

## 1 作型の考え方

下記作型を参考に、計画的な育苗を行ってください。

作型 (予冷库利用)	入庫	出庫	定植日	陽光 処理	定植時の分化程度
株冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10~14日	3回 2回 1回	分化~ガク片形成
株冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15~18日		分化~ガク片形成
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19~		分化
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10~14日		分化
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15~18日		
自宅株冷の2回目処理 (10日間程度処理)			9月19~22日		
普通ポット			9月20~25日		肥厚後期
普通ポット(厳寒期安定出荷)			9月26~28日		

◆鉢上げが遅れたり、根傷みなどで生育が遅れた(クラウン径8mm未満)場合や病害の発生がみられる(炭そ病、うどんこ病)場合は、無理に早い作型にせず、良い苗に仕上げることを優先してください。

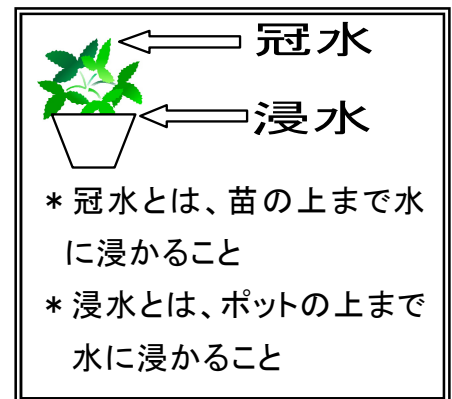
◆自宅株冷の2回目処理(短期株冷)は、普通ポットよりも花芽分化が遅くなる可能性があります。

## 2 育苗管理について

### (1) 浸水・冠水対策

梅雨時期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策(溝の設置や排水ポンプの準備など)をしておきましょう。

- 基本的に、浸水・冠水する恐れがある場所で育苗しない。
- 冠水した苗は使用しない。
- 浸水した苗は水洗いした後、「炭そ病」の防除を行い、ポットは乾かし気味に管理する。
- 降雨後、急速に晴れ上がるような時は、寒冷紗で被覆し、葉かき作業は、根が回復してから行う。



### (2) 肥培管理

充実した苗作りに向けて、過不足のない肥培管理を目標にしますが、「炭そ病」の危険性がある場合は、窒素過多にならない管理を徹底して下さい。

- 活着したら追肥(置き肥)を開始する。
- 活着後、2回程度液肥を施用する(例:OK-F-1で1,000~1,500倍)。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。
- 「炭そ病」が確認された場合は、追肥を控える。
- 育苗後半の極端な肥料切れは、花芽分化の遅れの原因となるので注意する。

【施用例】	6月下旬	⇒	7月中旬(追肥)	
	IB化成で 1~2粒/鉢		夜冷・株冷Ⅲ型 : 液肥で調整 上記以外の作型 : IB化成1~2粒/鉢追加	

(注意)置肥の肥効は気象条件によって変わります。3寸ポットの株冷Ⅲ型・Ⅳ型・Ⅴ型の最終追肥(液肥のかん注)時期がそれぞれ8月5日・8月10日・8月15日であることを考慮して投入するようにしてください。

### (3) かん水

「あまおう」は湿害に弱いいため、過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態(根の状態)を常に観察してかん水を行って下さい。

- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れ状態にしない。  
特に、夕方のかん水が必要な場合は、葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、少量多回数かん水を心がける。
- 培土が乾かない場合は、排水不良又は根傷みが生じている場合もあるので注意する。

#### (4) 葉かぎ

- 葉かぎは、活着後、根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は、最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3～4枚を確保する。(ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。)
- 生育不良時や降雨直前、雨天時の摘葉はしない。
- 摘葉作業前と摘葉作業直後は、「炭そ病」の予防防除を必ず行う(傷口からの感染防止)。

#### 【最終の葉数及び最終の適葉時期の目安】

株冷入庫時	4～5枚(最終摘葉 入庫15～10日前)
夜冷開始時	3.5枚(最終摘葉 処理開始直前)
普通ポット定植時	6枚(最終摘葉 8月30日頃)

### 3 病害虫防除

- 農薬ごとの使用回数制限は、親株の切り離しからカウントされます。
- 予防防除に心がけて下さい。
- 薬剤散布は気温が低い時間帯に行う。(高温時は薬害発生のリスクが高まる)

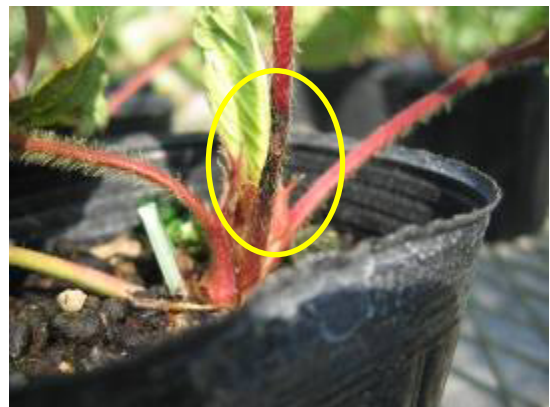
#### 炭そ病

#### 「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します

- 「炭そ病」は濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的な農薬散布(特に降雨前後)を徹底する。降雨が連続する場合も、雨の合間をみて農薬散布を行う。
- 葉に病斑を確認した場合除去し、その周辺1mの株も除去する。
- 排水溝等の整備など、育苗床の排水対策を十分に講じておく。
- ポット間隔をできる限り広くとる(18cmの間隔を確保する)
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い(特に梅雨期)。ただし、換気に心がけ、過湿にならないよう注意する。
- 窒素過多は発生拡大を助長するので、過剰な追肥は控える。



「炭そ病」葉の病斑



「炭そ病」ランナーの病斑

## うどんこ病

「うどんこ病」の症状がある苗を入庫しない。

- 病状の進展が早い梅雨期を中心に予防防除を行い、病斑の上位葉への進展を抑制する。
- 不要な下葉を除去した後に、薬剤散布を行う。
- うどんこ病の孢子発芽適温は20℃前後なので、うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。  
(入庫時や定植時に、病徴のある葉を除去しておくこと。)

## 疫病

- 梅雨時期～8、9月の高温多雨期に発生が多い。
- 7～8月に薬剤による予防防除を行う。
- 古葉かぎ等植物体に傷が付く管理は、雨天日及び降雨が予想される前は避ける。

## カキノヒメヨコバイ

- 上位1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 被害の多い7～8月に、定期的な薬剤散布を行う。

## ハダニ類

- 発生が多い場合は、葉の展開が遅れ、苗の生育が悪くなる。
- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。
- 低温処理開始までに必ず防除を行い、ハダニの発生の無い状態で入庫する。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に影響の長い農薬の使用を避ける。

## コガネムシ類幼虫

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンSLゾル 500 倍のポットかん注を行っておく。

## 4 本田管理について

ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに、有機物を十分施用し、8月中旬には定植床の準備が終わるように、計画的な作業を心がけてください。

● 有機物の施用	・前年度の栽培により消耗した土壌有機物の補給 ・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。
● 雨にあてる	・土壌中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出 ・土壌中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
● 土壌消毒	・土壌病害虫(ネグサレセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除 ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。 (土壌病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う) ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤・クロピクフロウ等がある。 ・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!**